

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 田部 俊充 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

1 前文

昨年度と同様、問題数は30問、解答時間は60分である。世界各地の生活文化の多様性(4問)、地域調査(4問)、世界の自然環境と自然災害(6問)、世界における貿易(5問)、村落・都市と人口(6問)、オセアニアとその周辺地域(5問)の大問より構成されている。学習指導要領との関係を見ると、「地理総合」の「A 地図や地理情報システムで捉える現代世界」の「(1) 地図や地理情報システムと現代世界」、「B 国際理解と国際協力」の「(1) 生活文化の多様性と国際理解」、「C 持続可能な地域づくりと私たち」の「(2)生活圏の調査と地域の展望」、「地理探究」の「A 現代世界の系統地理的考察」の「(1)自然環境」、「(2)資源、産業」、「(4)人口、都市・村落」、「B 現代世界の地誌的考察」の「(2)現代世界の諸地域」、「C 現代世界におけるこれからの日本の国土像」の「(1)持続可能な国土像の探究」から出題されている。

大学入試センターの問題作成方針にて、①知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う問題の作成、②学習の過程を重視した問題の作成、③多様な入学志願者の学力を適切に評価する問題の作成が掲げられている。また、地理に関しては、④地理に関わる事象を多面的・多角的に考察、構想する過程を重視するとあり、「地理的な見方・考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力を求める」とある。これらの点については、総評・まとめで述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 世界各地の生活文化の多様性に関する大問である。「地理総合」で学習する「国際理解と国際協力」の「生活文化の多様性と国際理解」に相当する。共通テストらしい組合せ問題が中心だが、単純に写真の場所や施設の分布の組合せを選ぶだけという、センター試験を彷彿させる内容のものもあった。難易度は低い。

問1 世界の祭礼に関する小問である。写真の撮影場所を地図から選ぶもので、歴史的な背景や宗教が分かれば容易である。基礎的な知識で解くことができ、難易度は低い。

問2 ワーキングホリデー制度に関する小問である。この制度を日本と最初に結んだ国が分かれば容易であるが、そうでなければ年代による日本との関係性を考慮して判断しなければならない。良問といえる。

問3 3か国の家計消費支出の割合に関する小問である。国民皆保険制度の有無や、エンゲル係数の高低など複数の一般常識を把握していなければ判断に時間を要す。良問である。

問4 日本の余暇活動に関する小問である。温泉、図書館、スキー場の分布について基本的な知識で解ける問題で、一瞬で判断できる。難易度は低い。できれば施設の分布のみを問うのではなく、例えば温泉と発電所の関係性やスキー場の利用客の変化(外国人の増加)など、異なる視点から多面的に捉えられるような問題の作成が望まれる。

第2問 地域調査に関する大問で、「地理総合」の「生活圏の調査と地域の展望」、「地理探究」では「持続可能な国土像の探究」の内容に関わるが、「地理総合」では、生活圏の調査を基に、地

理的な課題の解決のために向けた取組や探究する手法について理解し、生活圏内や圏外との結び付き、地域の成り立ちや変容、持続可能な地域づくりに着目して、課題解決に求められる取組を多面的・多角的に考察することを求めている。「地理探究」は日本の国土像を対象とするため、本問は「地理総合」からの出題ととらえる。第2問では、地域に関する知識もさることながら、地形図と景観写真を対照できる力、新旧地形図から地域の変化を読み取る力、説明文や既有知識からグラフの形状を予想できる力、様々な資料を組み合わせながら地域の現状を読み解く力が求められている。これまでの地理学習で、このような作業を通して地理的見方・考え方を養ってきたかが問われる問題である。問題の難易度は標準的であると考える。できれば、学習指導要領にある「地理的な課題とその解決に向けた取組」を通して考えさせる問題があるとよい。

問1 地形図と景観写真を対照し、地形の位置と形状から、撮影地点と方向を考え、判断させる小問である。砂浜や砂州の位置から、容易に解答できると考える。高等学校地理の教科書では、空中写真と地形図を対照した記述が多く、景観写真と地形図を対照した記述は、中学校以下の教科書に多いため、容易に解答できると考える。

問2 新旧地形図を見比べて、地域の変化を読み取る小問である。地域の形状、交通路、地図記号の読み取りは頻出である。本問で問われている市役所の地図記号は「地理総合」の教科書だけでなく、中学校地理の教科書にも見られるため、容易に解答できる問題である。

問3 資料の説明文と「地理探究」の教科書本文にある「自給できる主な鉱産資源は、山口県で産出される『石灰石』と『石灰石』を加工してセメントにする」という知識から、解答させる問題である。知識がなければ難しい問題となる。この問題は、本試験第4問の問2と同じ形式であるが、本問の方が難易度は低い。

問4 地図やグラフを見ながら、会話文の正誤を判断する小問である。グラフの読み取りは容易であるが、地図はサイズが大きく鮮明でなければ判断しにくい。二つの地図（レイヤー）を重ね合わせて特徴を見出す、GISというオーバーレイができるかをみている。難易度は、地図が分かりにくいと判断する受験者にとって難易度は高いと考える。

第3問 世界の自然環境と自然災害に関する大問である。世界各地の自然環境の特徴やその特徴と災害を結び付ける問いが出題されている。世界の地形や気候に関する問いは毎年出題されている。いずれも写真、地図、統計資料を参考に考察を行うが、基本的な知識があれば解ける問いが多く、難易度は一部の問いを除き、標準的といえる。防災は「地理総合」と「地理探究」の柱の一つであり「自然環境と防災」を意識し、日本や日本周辺に関する問いを、1～2問程度増やしてほしい。

問1 アドリア海周辺とスマトラ島周辺における震源の深さに関する小問である。活断層型地震と海溝型地震では、震源の深さが異なることが多いという知識と海溝型地震の方が巨大地震を引き起こすことが多いこと、スマトラ島周辺では巨大地震が頻発していることを理解している必要がある。いずれも高校の教科書で掲載されているが、難易度はやや高いといえる。思考力、判断力が必要とされる良問である。

問2 世界の各地の自然環境の影響を受けた巨石の分布に関する小問である。写真には解説もあり、また巨石だけでなく、周囲の植生景観の特徴に気付くことができれば、比較的容易に解答できると思われる。写真の読み取りに時間を要しないことから、難易度は平易な問題であるといえる。解説があることにより、写真がなくても解答が可能である。したがって、解説なしで写真のみで判断をさせる問いでもよいのかもしれない。また図2が問1と共通で、掲載位置に関して、やや違和感がある。問1と問2で共通の地図を使うのであれば、問1の

前に各問共通の図を掲載する方が望ましいのではないか。

- 問3 世界各地の気候に関する小問である。非常にオーソドックスな小問であり、気候の基本的な知識を有していれば解答可能である。難易度は低い問いであるが、全設問の中で、数問、ひねりがないが、標準的な知識を問う問いが出題されることは望ましいといえる。強いて言えば、3地点にして、組み合わせで6択にしても良いかもしれない。
- 問4 インドネシアにおける土地利用の変化に関する小問である。図で示された変化を読み取る力と環境変化に関する知識が求められるが、図の読み取り、説明文ともに平易であり、地中に蓄積される炭素量の増減と環境問題の関係を問うだけの問いになっている。熱帯雨林の開発全般について、社会問題等も含めた総合的な問題にするなど、工夫があっても良いかもしれない。
- 問5 アメリカ合衆国、オーストラリア、台湾における地震と熱帯低気圧の発生数と被害に関する問いである。プレート境界の位置や熱帯低気圧の進路、特に巨大地震の発生の有無と頻度に関する知識があれば、解答は比較的容易である。
- 問6 日本における地震発生時の地形条件とリスクの関係に関する問いである。台地と沖積低地の地盤の硬軟の差と、地震発生後の基本的な被害について理解していれば、解答は容易である。「地理総合」と「地理探究」で、GISの活用・防災などが柱になっていることなどから、グラフの読み取りではなく、該当地域の地図で出題をする問いの方がよいかもしれない。
- 第4問 世界における貿易に関する大問である。共通テストらしい問いが中心であるが、中間財・資本財・耐久消費財などについて具体的にイメージできないと、用語の説明があるものの、判断に時間を要したかもしれない。抽象的な用語を具体的に解釈する経験を日頃から積んでいないと、共通テストの形式に慣れていても解答は難しい。難易度はやや高い。
- 問1 世界の農水産物の自給率に関する小問である。イギリスの農水産物の自給率の特徴をおさえていけば解答は容易だが、インドネシアの自給率の図があることで判断に時間を要したかもしれない。インドネシアという国にとらわれず、広くモンsoonアジアの自給率として捉えると判断しやすいだろう。良問といえる。
- 問2 中国とブラジルの大豆とトウモロコシの生産量の変化と輸出率に関する小問である。両国の近年の動向をおさえていけば判断は容易である。難易度は高くない。
- 問3 中間財の果たす役割に関する小問である。共通テストらしい問い方であるが、中間財の具体的なイメージや日本・アメリカ合衆国・中国の近年の貿易事情を把握していないと判断に時間を要す。難易度はやや高いと言える。
- 問4 日本の貿易品の変化に関する小問である。1970年と2020年の日本の生活状況をふまえての判断が必要となる。さらに、「資本財」「消費財」「耐久消費財」については、語句説明があるものの具体的に何を指すのか想起できないと判断に時間を要す。難易度はやや高いと言える。
- 問5 いくつかの国による国際特許の出願件数の推移に関する小問である。グラフと地図の複数の資料から組合せを求めるもので、共通テストらしい問い方である。アメリカ合衆国と中国の1995～2023年までの国内事情と国際特許に関する国の動向をおさえていけば解答は容易である。難易度は高くない。
- 第5問 村落・都市と人口に関する大問である。各設問につながりがなく、複雑な資料読解が求められていないため、教科書の基本的な内容を理解していればおおむね解答できる。よって、難易度はさほど高くない。最後の問6は、前回の本試験と追試験、今回の本試験と同様に、「持続可能な国土像の探究」から出題されていると考えられる。「持続可能な国土像の探究」を「系

統地理的考察」に組み込むことには議論の余地があるものの、この形式が、授業実践者に対して両単元を接続した授業実践の在り方としてまなざしを向けたものであるのならば、一つの指針として参考となる。

問1 三つの集落の景観写真と特徴について、その組合せを問うた小問である。Aは環濠集落、Bは林地村、Cはタウンシップ制による散村で、それぞれの特徴に対する知識をもって容易に解答できる。基本的な問題ではあるが、景観写真を取り入れたことは評価できる。

問2 インド、サウジアラビア、中国における都市人口率の推移を判断する小問である。サウジアラビアの国土のほとんどが砂漠で相対的にみて都市人口率が高いこと、中国の改革開放政策以後の経済成長によって都市人口率が高まったことと理解があれば、容易に解答できる。

問3 世界の地域ごとの合計特殊出生率と老年人口率に関する小問である。東アジアを解答するようになっており、そのほとんどを占める日本、韓国、中国の合計特殊出生率が低いことから解答できる。ヨーロッパとの判断で少し迷うところはあるが、人口転換の観点から、ヨーロッパは早くに少産少死型となり老年人口率が高まったという理解からも解答できる。

問4 エジプト、カンボジア、ノルウェー、パキスタンにおける女性の労働力率と女性就業者に占める第三次産業就業者の割合を判断する小問である。横軸を宗教的背景、縦軸を経済水準として相対的にみれば判断できる。難易度は標準的で、人口に関する指標から多面的に考察する良問となっている。

問5 人口 15～20 万人の三つの都市の特徴について、三つの指標をもとに判断する小問である。説明文から特徴を抽出して、表2の数値に着目するプロセスが必要で、資料の読み取り方の基本に沿った問題として評価できる。難易度は高くない。

問6 日本における高齢化による課題を題材とした小問である。図3の老年人口率と老年人口増加率の判断は、大都市圏や沖縄県を見れば容易に判断できる。ただ、老年人口率の階級区分図を見ると沖縄県がどの凡例に該当するか分かりづらいため、図を拡大して提示する必要がある。

第6問 オセアニアとその周辺地域をテーマにした地誌的考察力について診断する大問である。本大問は、特定の地理的事象を切り口に、それと関連する複数の諸事象を課題解決のプロセスに沿いながら段階的に小問構成した上で個々の解答を導き出していく動態地誌的な性格を有するものではなく、複数の地理的諸事象を網羅的に取り上げながら小問を構成した上で個々の解答を導き出していく静態地誌的な性格の強いものとなっている。各小問は、主題図や写真、グラフ、統計などの資料を読み解き、そこから判断したことを選択肢と合致させて正解を導いていく形式であり、基本的な知識をベースに思考力・判断力が求められる類のものであった。問題の難易度としては全般的に平易なものとなっている。

問1 地図上に示された有袋類の生息域の分布を周辺の地形的特徴との関わりから考察する小問である。オーストラリアとその周辺島嶼国の地形の特徴について世界の大地形の分布との関わりから理解していれば解答は容易である。

問2 地図上に示された都市の位置とそれに該当する雨温図を選択する小問である。赤道を挟んだ気候区の分布と各気候区の特徴について理解していれば解答は容易である。

問3 オセアニア各国の食生活の特徴について主要農産物の1人当たり年間消費量を切り口に考察する小問である。ヨーロッパ系移民の多いオーストラリアとニュージーランドにおいて小麦の消費量が多いこと、赤道に近いサモアの気候環境の特徴について理解していれば解答は容易である。

問4 オセアニアと域外他国との経済的関係の推移について貿易を切り口に考察する小問で

ある。同地域と日本、イギリス、中国との関係について周辺を取り巻く国際情勢との関わりから理解していれば解答は容易である。

問5 世界各国からオーストラリアへ流入している移民の集住地の特性について考察する小問である。先進国のインナーシティ（遷移地帯）に特徴的なマイノリティー（少数派）とされる移民コミュニティの存在と、郊外地域に特徴的なマジョリティー（多数派）の存在について理解できれば解答は容易である。

3 総評・まとめ

本年度は標準的な問題が多いが、易しめの問題から難しめの問題までバランスよく設定されている。また、複数の資料を用いて考える問題や思考・判断に時間を要する問題も見られる。いずれの小問も、これまでの学習で得た知識や技能を組み合わせつつ、地理的概念や地理的課題を見出し、諸資料をもとに思考・判断する問題であり、コンテンツだけでなくコンピテンシーを重視しているものと思われる。

大学入試センターの問題作成方針の①知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う問題についてであるが、複数の資料の分析と既有知識と結び付けて解答する問題がある一方で、なかには図表や写真の読みとりをしなくても説明文のみで解答できる問題もみられた。②学習の過程を重視した問題の作成については、第4問にて探究活動を行う設定で出題されているが、2024年度本試験の「地理B」や2022年度本試験の「地理B」などにみられた探究活動のまとめに該当する部分の出題がみられず、「地理的な諸課題の解決に向けて構想する力を求める」ことについては、薄まっていると思われる。また、各小問についても羅列的な印象を受けることから、学習の過程がわかるような小問のつながりを意識してほしい。③多様な入学志願者の学力を適切に評価する問題の作成については、Google Earthの画像を用いるなど、従前よりも画像の解像度を上げるなど意欲的な改善がみられる一方、第5問の間6の沖縄県のように識別しづらいものもみられる。④地理に関わる事象を多面的・多角的に考察、構想する過程については、多くの問いでみられる一方、第1問の間4のように知識だけで解ける問題が散見されるほか、第6問のオセアニア地誌が静態地誌的な性格が強いことがあげられる。

4 今後の共通テストへの要望

従前から要望していることであるが、図表等において、配慮の必要な受験者を考慮して、グレースケールの濃淡やコントラストに工夫してもらいたい。写真の解像度は従前より改善されたが、第5問の間6の沖縄県のように分かりづらいものもあり、適宜拡大した図を添えるなどの工夫がほしい。

次に設問の工夫についてである。共通テスト移行当初の、段階を踏まえて正解を導き出す問いや探究学習のまとめにあたる解決策に関する問いが減少し、小問につながりがなく羅列している様子がみられる。学習指導要領にも、「地理的な課題とその解決に向けて構想」する力を養う目標があることから、解決までのプロセスがわかる大問にすることを望む。地誌に関する大問では、静態地誌的な性格が強く、従前には動態地誌や比較地誌の問題もあったことから、出題方法を検討してほしい。また、設問の内容や切り口に関しても、改善を望みたい。共通テスト移行当初にみられたような、生徒の生活に身近な要素からの出題が減りつつある。

共通テストは各種メディアでも注目される入試問題であるからこそ、今後の学びの形式を世間に打ち立てる意義がある。また、メディアで注目されることによって、受験者に学ぶことの意義や楽しさを引き出させることができ、主体的な学習につながっていく。また、第5問の間6の評価にも

ある通り，授業実践の在り方についても考えさせる出題があると，現場教員にとっても指導の指針につながる。

引き続き，知識・技能と思考・判断の2つの資質・能力がバランスよく組み合わせられた問題が多く出題され，学習に取り組んだ受験者の成果が反映できる「良問」の作成を期待したい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 小林 正人 会員数 約300人)

T E L 0422-46-4181

1 前文

全体としては、高等学校までの学習内容に概ね沿った問いが圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問は見られなかった。また、全ての小問において図や表、資料などが少なくとも一つは提示され、設問文だけのものはなかった。本試と比較して、大問構成にも大きな違いはなかった。例年、追・再試験の方が難易度が高いように感じられることが多かったが、今年度については追・再試験の方が平均が高かったのではないかと思われた。この要因として、資料数を精選し、問い方も複雑でなく、基礎的な知識を用い短時間に機械的に判断していく問いが本試より多かったことが関係していると考えられる。旧課程のセンター試験時代を彷彿とさせるような問いがいくつか見られた。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

追・再試験で出題された大問構成と内容を昨年度と今年度で比較すると、第1問が「穀物の生産や消費」から「世界各地の生活文化の多様性」に、第2問が「愛媛県今治市の地域調査」から「山口県周南地域の地域調査」に、第3問が「世界の自然環境と自然災害」で同様、第4問が「世界の資源と産業」から「世界における貿易」に、第5問が「都市の規模や機能の違いと、それがもたらす課題」から「村落・都市と人口」に、第6問が「北アメリカと中央アメリカ」から「オセアニアとその周辺地域」となった。この中から、昨年度との違いが大きいと思われる点を挙げると、まず、本試と同様に「地理総合」との共通問題となる第1問で生活文化が大きく押し出された。また、第5問のように、今年度の方が系統地理の単元名で見えるような、一般的なタイトルが用いられた。昨年度のこの大問は、各小問においても「都市機能の集中とその影響について考える」との文言が繰り返されており、新課程らしい印象を受けた。今年度はそうした追究的な姿勢がやや弱まったように感じ、やや残念である。

全体の小問数は30問で変更はなかったが、第4問が小問六つから小問五つに、第5問が小問五つから小問六つに変更された。これらの小問数の変化は、本試験と同様に受験者に大きな影響は与えなかったと思われる。

第1問 「世界各地の生活文化の多様性」 本試験と同様に、生活文化が「地理総合」との共通問題となった。世界各地とタイトルにあるように、問4以外は小問中でも地域を超えた生活文化が問われた。本試験におけるこの大問は、仮に「地理探究」におけるそれぞれの地域の地誌としての小問でも違和感がないものも見られたが、追・再試験では「地理総合」との共通問題らしい仕上がりとなっている。本試験と同様に、冒頭の大問として正解率が高いものであったことは歓迎したい。

問1 北ヨーロッパにおける冬至の祭礼が問われた。写真でそれぞれの地域を特定でき、キャプションも簡潔である。写真を用いた小問としては完成度が高い。

問2 日本とワーキングホリデーを通じた3か国と人の移動の推移に関する問い。オーストラリアと先行してきたことや、近隣国での移動が多いことを踏まえば正解できる。

問3 途上国でエンゲル係数が高くなることからGがインド、日本とアメリカ合衆国では後者の方が医療費がかかり、娯楽に比べ住宅費の方が高いと判断する。やや公民的な知

識も必要とした。

問4 日本の余暇活動施設の立地に関する問い。図形表現図の違いが判別しやすく、受験者も自信を持って解答できたのではないか。

第2問 「山口県周南地域の地域調査」 本試験と同様に、地域調査に関する大問が「地理総合」と『地理総合、地理探究』の共通問として出題された。第1問と同様に難易度は抑えられており、来年度以降も「地理総合」との共通の大問では難易度が高くないようお願いしたい。新旧地形図の読図も含め、地形図の読み取りが小問二つ分出題された点は歓迎したい。

問1 地形図から読み取れる矢印方向の景観と、写真との一致地点を判別する問いで、これまでも出題されてきた定番の形式。写真も見やすく、受験者も安心して取り組めたのではないか。

問2 新旧地形図から読み取れることと下線部を照らし合わせ、正誤を判断する問い。下線部④のみ、目的の適切性を判断する必要があったが、基本的な地図記号や地域の変容も読み取りやすく、十分正解できる。

問3 近年定番化している異なる2要素の掛け合わせ問題。本試験よりも資料中の説明文が簡潔で、「石灰石」や「石炭」といった資源の割合が高い方が輸入または移入、「石灰石」が国内で「石炭」が国外と、円グラフの違いも読み取りやすい。資料の読み取りについては、このくらいの難易度が適切と思われる。

問4 初見の資料が見開き1ページに渡って提示され、一瞬身構えるものの、下線部と照らし合わせながら資料を読み解いていくと、どれも傾向が読み取りやすく、難易度は高くない。丁寧に読み取った受験者が自信を持って解答できたのではないか。

第3問 「世界の自然環境と自然災害」 本試験と比較して難易度は低い印象で、どの小問も片側1ページに収められ、資料も精選されていた。一方で、基礎的な知識をもとに判断していく小問が続く、丁寧に思考・判断させる要素が少なかった。基礎的な知識をもとに短時間で判断していくものと、初見の資料をやや時間をかけて丁寧に読み取り、思考・判断させるものとの適度に組み合わせて大問を作成することが望まれる。バランスという意味では、6小問中の3小問で地震が扱われるという偏りがあったため、改善をお願いしたい。また、世界図が資料として提示されなかったことも残念である。世界図を用いながら世界を大観させ、考察させるような問いの作成を望む。

問1 プレート境界での地震の分布と震源の深さに関する問い。スマトラ島付近は定番で、沈み込み帯ではプレートの移動の方向に沿って震源が深くなっていくことが分かれば正解可能。

問2 巨石の見られる地点とその成因に関する組合せ6択問題。巨石を切り口にするというユニークな問いであったことは評価したい。かつて大陸氷河が覆っていた範囲や、キャプションから残丘であると気付ければ、基礎的な知識で正解可能。Eも背景のヤシの木や、雨が多い地域で土石流も発生しやすいと考えると地点を選べる。

問3 南半球の地中海性気候が問われた。全ての地点を同時進行的に吟味していくと時間を要するが、地点セを答えるという限定があったことで、気温や降水量の該当し得ないものを切っていくことで正解を探した受験者が多かったのでは。定期考査などで、それぞれの地点を考えていく道筋を丁寧に聞くようなアレンジができそうな問いだった。

問4 泥炭湿地林の開発に伴う生態系の改変と、新たな火災による環境問題というテーマは評価できるが、正答そのものは資料と関係しておらず、生物の知識で解くような作り

だったことは残念である。長文の解説がなされているように、一言で説明できない事象であるが、他の資料を組み合わせたり、問う点を工夫したりするなど改善の余地が残る。

問5 地域や災害の違いによる自然災害の発生件数と死者数についての違いを問うもので、台湾では地震も熱帯低気圧も多く、アメリカ合衆国は熱帯低気圧が多くなると考える。

3か国の組合せ6択問題ではなく、自然災害と国という二つの要素を隠して出題したのは、難易度を上げる狙いがあったか。

問6 リード文の冒頭に「持続可能な国土像」との言葉があり、学習指導要領を意識したものと思われるが、問われた内容は「持続可能な国土像」まで深まっておらず、冒頭の一文がなくとも成立した。震央からの距離と倒壊率が、沖積低地と台地でここまで異なることは、改めて目にすると驚きであり、資料の示唆性が高かった分残念である。また、液状化について問う二つ目の要素Sが、前後の文脈と知識で解けてしまい、それまでと関連の薄い独立した問い方であるという印象も受けた。「持続可能な国土像」は設問化しづらいテーマだと思うが、改善を期待したい。

第4問 「世界における貿易」 「貿易」をタイトルとするものであったが、特定の産業分野に偏ることなく出題されたことは評価できる。本試験では世界図が二つの小問で出題されたが、追・再試験では小問一つのみであった。地図を用いて世界を大観させるような小問の作成を期待したい。本試験と同様に、統計数値に依拠した小問が多かった。本試験でも同じ意見を述べたが、産業に関する地理的見方・考え方は統計数値の読み取りに限られるものではないはずであり、来年度は是非バランスの考慮をお願いしたい。

問1 三つの国の品目ごとの食料自給率が問われた。日本が手がかりとなってAが穀類と判断でき、Bの野菜や果実類の自給率が低いAを、気候的に冷涼なイギリスと考える。それぞれの国が何等かの品目で自給率が低いという弱みを持ち、それと貿易を掛け合わせて考える小問の意図があったと思われるが、自給率がどの品目もおおむね100%であるインドネシアを3か国に含んだことは、それにそぐわない印象を受けた。

問2 輸出率の高い国がブラジルという判断はつくが、大豆とトウモロコシの判断はどのように付ければ良かったのだろうか。どちらの農作物も、飼料や工業原料として輸出に回るものが多いことまでは「地理探究」の中で学習されていると思われるが、資料中で差のある部分をいくつか見出しても、それらと一般的に学習されている内容を結び付けるのは難しい。出題した農作物が妥当であったか、再考をお願いしたい。

問3 中間財に着目した点は評価したい。一方で、資料1の情報量が多い割に輸出額だけで3か国を特定できた。組合せ6択問題でなく、中間財の比率を丁寧に読み取る中で、現代の貿易の構造が見えてくるような問い方もあったのではないか。

問4 本試験でも見られたが、問題の設定と独自のカテゴリの理解に時間を要した。一方で、本試験のこうした作りの問いよりは、資料中の説明が簡潔、かつ帯グラフ内の差が明瞭で解きやすきはあった。問3と問4の作りが似ており、この点は再考をお願いしたい。

問5 見開き1ページに渡る問いだったが、示された資料の違いは読み取りやすかった。特許件数や技術貿易をテーマにしたのも好感が持てる。

第5問 「村落・都市と人口」 村落からの出題が見られ、大問のタイトルにも村落が加わった。本試験と同様に、統計数値を読み取って解答する小問がほとんどであった。地理的見方・考え方は、統計数値の読み取りに限られるものではないはずであり、資料や問い方の工夫を期待する。

- 問1 この小問のみ統計数値を用いない、景観写真によるものだった。写真は判別しやすく、文章も簡潔。景観と合わせた村落の知識・理解が問われた。
- 問2 都市人口率の推移に関する組合せ6択問題。複雑な設定もなく、3か国の違いも明瞭で、時間を要さないという点は評価できるが、センター試験に戻ったかのような印象を受けた。
- 問3 この小問もセンター試験時代に見られた資料と問い方であるが、東アジアの少子化という現代的な変化に着目できたかを問うていた点は評価できる。
- 問4 この小問もセンター試験時代に見られた資料と問い方であるが、女性の労働力率というジェンダーを意識した問いであることは評価したい。北欧で女性の労働力が高いことは予想できるが、どのくらいの受験者が社会主義圏でも男女とも労働参加が求められるため同様の傾向を示し、かつカンボジアが該当すると判断できたか。正答率は高くなかったように思われる。
- 問5 統計数値から読み取れる都市の特徴と合致する文章との組合せ6択問題。数値のばらつきが読み取りやすく、文章も簡潔だった点は評価できる。
- 問6 第3問の問6と同様に、「国土像」がリード文に用いられた。こちらの方が「国土像」を考える上で高齢化の進行は地域によって異なり、老年人口率が高いことと、老年人口の増加率が高いことの違いを考えさせるような、図を判断させるところまでは一連の流れがあるように感じられた。一方で、サの要素は当てはまらない方の文章から考えると容易に解答でき、あっけない印象を受けた。大学生が代表的な例かはやや疑問が残るが、交流人口の増加を取り上げる意図があったと思われ、その点は評価できる。
- 第6問 「オセアニアとその周辺地域」 この数年、本試験では広範囲を対象とした地誌が出題されてきたが、追・再試験では昨年度の追・再試験と同様に一般的な地域区分に基づく地誌が出題された。小問五つのうち三つはオセアニア内の地域差や特徴を掘り下げる問いで、残り二つは他地域との関わりや人の移動を扱っており、自然環境と人間社会のバランスも良かった。
- 問1 動物の生息域の説明の中に、生息する島周辺の自然環境が盛り込まれており、動物を切り口としたユニークな問いとして評価したい。リード文の行間が詰められていたが、動物の写真の資料から右ページに配置しても問題なかったのではないかな。
- 問2 4地点の雨温図が示され、ニュージーランド南島に該当するものを選ぶ問い。緯度に着目すれば正解でき、気候の設問として資料も問い方も定番である。
- 問3 明かされているオーストラリアにニュージーランドが、フィジーにサモアが傾向として似るはずであると考えられれば正答に至れた。サモアは受験者にとってなじみが薄い国だったと思うが、知識に頼らずともリード文や注で与えられた条件や図を注意深く観察することで考える道筋のヒントを得られる作りの問題だった。
- 問4 オーストラリアの輸出入相手の変化について問う組合せ6択問題。イギリスから日本、そして中国へとアジアに比重が移っていることから判断は容易。
- 問5 オーストラリアの5大都市への、出身国別流入割合という、ここまで詳細な資料は受験者にとっては初見だったと思われる。説明文を丁寧に読めば、非英語圏ほど特定地域に定着するとあり、ここからチがイギリスと判断できる。19世紀の都市規模は現在よりも小さいと思われ、当時からアジア系移民が集住した地域は新たに形成された郊外ではなく都心周辺と考える。最終問題として、出身国による都市指向の違いと、都市構造と合わせた集住傾向について問う、骨のある問題だった。

3 総評・まとめ・要望

新課程になって2年目，本試験と追・再試験を合わせれば計4回分の『地理総合，地理探究』が世に公開されたことになる。来年の受験者はもちろん，現場で指導する地理担当者も出題の傾向を分析しており，出題された内容や形式を踏まえて指導内容を考えていく。前文において，「旧課程のセンター試験時代を彷彿とさせるような」と述べたが，これが悪いということではない。複数の資料や複雑な問い方をせずとも，基礎的な知識を活用して思考・判断する問いは作成可能であり，地理的な見方・考え方を測ることは十分可能である。一方で，公開されている作問の方針には，「地理に関わる事象を多面的・多角的に考察，構想する過程を重視する」ことや，「地理的な見方・考え方を働かせて，地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，地理的な課題の解決に向けて構想したりする力を求める」ことが挙げられており，特に「構想する力」を問うには，先に述べた形式の問題だけでは不十分であろうし，今年度の問題は昨年度の問題よりも「構想する力」を問う要素がやや弱まったように感じられた。地理的な見方・考え方を働かせて，現代の諸事象の本質や課題を見抜き，解決に向けて「構想する力」を問えるような作問を期待したい。